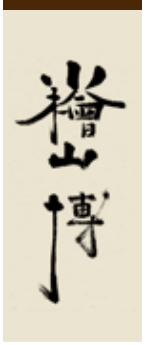
連載エッセイ㊽
人生讃歌



鍵について

なぜ家や部屋の扉に鍵をかけるようになったのか。人のなかには黙って物を失敬する人もいると考えられるようになったからだろう、と思う。ぼくはこれまで何度か物を無断でいただいたことがある。どれも食べ物と生活物資で錠や鍵とは関係ない。

一度めは八歳のとき、家族が農作業でいないとき父母の寝室の奥の押し入れから砂糖を見つけて舐めた。甘かった。砂糖がとても貴重なときで、母は台所にではなく白い布袋に入れて口をしっかりしばり、子供らに見つかりにくい自分らの部屋の押し入れに隠していたのだ。二度めは十歳ころ、学校帰りに道路ぶちにあった高橋さんの家の庭のリンゴの木から、赤いリンゴを一個断りなしにもいで齧った。びくついていたせいか味がなかった。

三度めは高校二年で苫小牧工業高校の寄宿舎にいるとき、腹が減ってたまらず近くの農家の畑のジャガイモを許しも得ずに食べた。もう一回はやはり高校三年の冬、寄宿舎のぼくら四人部屋でストーブにたく石炭が買えず、雪が降ってぼくらの足跡が消える夜中、近くの若草小学校の石炭小屋から馬穴に二杯の石炭をこれも失敬してきて寒さをしのいだ。

だがそれから四十九年後、ぼくらがジャガイモを失敬した農家の人が、ぼくらの行為を知ってて見て見ぬふりをしてくれたことを知って、ぼくは天を仰いだ。また石炭の件も、卒業して三十五年後、ぼくが物書きになって若草小学校のPTAに講演に呼ばれて行ったとき、ぼくのほうからみんなの前で謝罪したら、笑ってくれた。人の情けが身にしみた。

★

いつだったかのテレビで、ポルトガルのある村で近所の家の鍵を人にあずける習慣があるというのを見た。場面に出ていた四十歳くらいの女性が家のまわりの庭の手入れをしながら、手に持った七、八軒ぶんの鍵の束をジャラジャラ鳴らして見せていた。近所の人が旅行したり長期の仕事で家をあけるとき、お互い鍵をあずけ合うのだと言った。理由を聞かれて彼女は「誰かが喜ぶことをしたい」と言って笑った。その笑顔のなかに、人と繋がり合わなくては生きられないのだからという心を、ぼくは感じた。

★

それで思い出した。だいぶ前、アメリカを一人旅したとき泊まったボストンの「フォーシーズンズホテル」とニューヨークの「エセックスハウス」の部屋の出入り口扉の錠のことだ。そのうち三個は日本のホテルでもついている鎖と鉄の棒。あとの二つがさらに太めの鉄の板製だった。これには驚いたが、さすが自分の命は自分で守ることを信条にしようとしている国だと思った。しかし疑い深いぼくは、頑丈にすればするほど泥棒のほうもそれに対応した方法を考え出すだろうと心配だった。

★

七十年以上前の、ぼくが生まれ育った山奥の村の百軒ほどの農家は、どこも玄関に鍵がかかっていたおぼえがない。いつ回

【小檜山 博 文学館が開館】2020年11月1日から北海道滝上町の文化センター内に、生原稿、掲載誌、文学賞、日記、写真、創作メモ、新聞記事など、70年にわたる活動資料の展示が開設されました。　紋別郡滝上町栄町（滝上町文化センター内）　☎0158・29・3735　10:00～17:00　年末年始休館（12/31～1/5）
アクセス：札幌駅からバスで約4時間30分、旭川駅からバスで約2時間30分　紋別空港から車で約40分

覧板を持っていって誰もいなくても、玄関の戸はあいた。家族で温泉や親戚へ行って二、三日家をあけても玄関の戸は自由にあいた。どの家にも玄関の戸には簡単な錠はついてたし心張り棒も用意してたが、使ったのを見たことがない。噂になるほどのおカネもちがいなかったから、泥棒のほうに意欲がなかったのかもしれないが、当時、一万四千人いた町全体で泥棒に入られた話は聞いたことがない。

★

ぼくは十九歳から都会に勤めて十年ほど下宿したりアパート住まいをしたが、自分の部屋に鍵をかけたことがない。いつも安くてボロなところを探して住んでいたし、部屋には安っぽい座り机一つと夜具一式と本十冊しかなかったから、泥棒が入っても仕事にならなかっただろう。もし入っても泥棒のほうが驚いて同情し、おカネを置いていってくれたかもしれない。そんな幸運もなかった。鍵の発想は、おカネや物を持っている人の思いつきだろう。ぼくみたいにとられる物がないと、錠も鍵も考えに浮かばないのである。

ぼくが住むところに鍵をかけるようになったのは結婚して子供ができ、公団住宅に入った三十五歳ころである。その後、自分の家に住んで五十年たったいま、ぼくは玄関の鍵や車庫の鍵、自動車の鍵や倉庫の鍵、ガソリンスタンドで油を入れるときの鍵まで持っている。鍵だらけで重くて、安いズボンのポケットが垂れ下がる。

★

五年前の二〇一八年二月二十三日、暖かいところへ行こうと妻と地中海のマルタ島へ行った。小さな団体に入った。札幌は氷点下十度でマルタ島はプラスの十五度と快適だった。ぼくは八十一歳だった。マルタは北海道の利尻島より少し大きい島で、農業、漁業、観光の、おだやかな国だと案内書にあった。二日ほどいて、ほんとうに人々の物腰やたたずまいの静かさにびっくりした。

三日目、船ですぐそばのゴゾ島という小さな島を訪れた。同行のガイドさんが、この島の村の家はどこも鍵をかけないと言い、われわれのなかから小さな笑い声が起こった。まさか、という笑いに思えた。ガイドさんが近くを通る四十歳くらいの島の女性を呼びとめて、この村ではどうして家に鍵をかけないのか聞いた。すると主婦らしいその女性は「なぜ家に鍵をかけなきゃいけないの？」と問いかけてきたのである。Ⓙ

挿絵／中江潤一

■小檜山　博（こひやまはく）：作家。神田日勝記念美術館名誉館長。1937年・北海道滝上町生まれ。『出刃』で北方文芸賞受賞。『光る女』で泉鏡花文学賞と北海道新聞文学賞受賞。1997年・札幌芸術賞受賞。2003年『光る大雪』で木山捷平文学賞受賞。2005年・北海道文化賞受賞。2007年・北海道功労賞受賞。